

## 自転車の新たな開発の始まり「折りたたみ自転車」 (1897年)

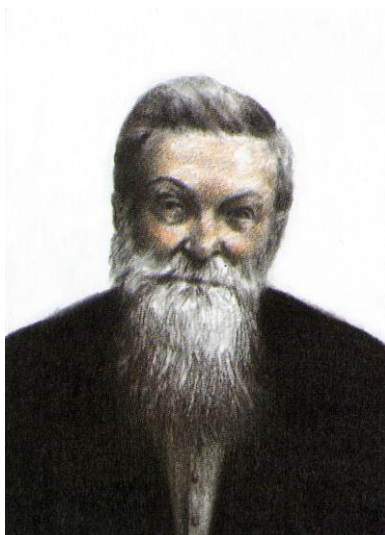


1885年に現代と同じ形の自転車が登場し、性別や年齢に関係なく誰でもが簡単に乗ることができるようになると、次に性能の向上をめざした新たな開発が始まりました。車輪に空気入りのタイヤが付けられたことで快適性が、ブレーキの改良で安全性が、3段変速機の誕生で機能性がそれぞれ向上しました。さらにこの頃の自転車はチェーンと連動して後輪とペダルが常に一緒に回転していましたが、力を加えなければ後輪が回転してもペダルを止めておくことができる現代の自転車と同じ仕組みが作られ、ペダルに足をいつでも置いておくことが可能となりました。

また、一部の国の軍隊が伝令用として自転車を利用していましたが、利便性が向上してくると各国の軍隊が次々に導入を開始しました。その過程で2つの車輪を重ねて背負うことができる軽量の折りたたみ自転車も考案されました。フランス軍が1895年に2つの車輪を重ねて背負うことができる重さ14キロの折りたたみ自転車を考案し、プジョー自転車は1897年から生産を開始しました。

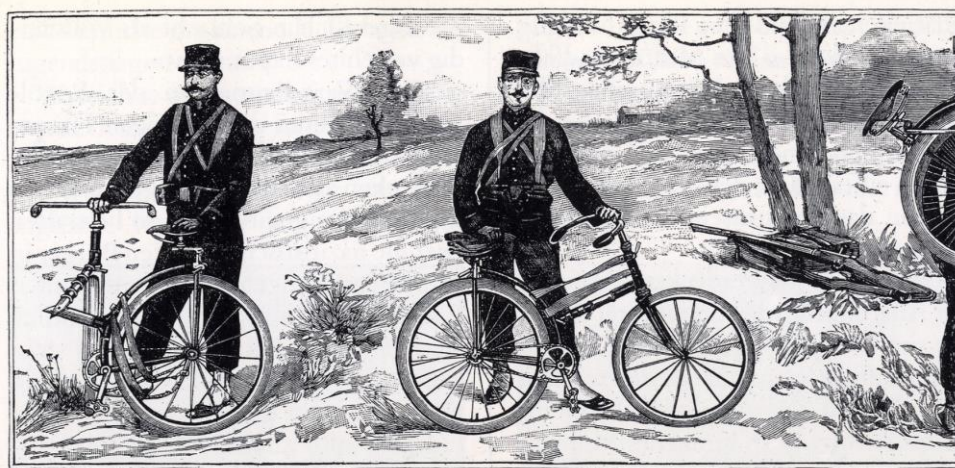
こうした新たな技術開発が19世紀の終わりには自転車製造を世界の主要産業の1つにまで引き上げ、大きく発展しました。工場も生産量も倍増を続けその影響は鉄鋼、ゴム、皮革などまで広がっていきました。

しかし、その栄光も束の間、20世紀に入ると自転車で培われた技術は自動車へ応用され、主役の座を奪われてしまいました。



ジョン・ボイド・ダンロップ (1840年～1921年)

イギリス人 空気入りタイヤを初めて自転車に利用することを考え、これで快適性が向上した



プジョー自転車製の折りたたみ自転車で、左の自転車は2つに折りたたんでいるところである



ビューリーミンが描いたフランス・プジョー自転車のポスター  
自転車で運んできた通信文を軍人に手渡す場面で、プジョー自転車がフランス陸軍でも大活躍していることを強調したポスターである



フランス・リシャール自転車のポスター  
自転車の重さが20～30キロもあった当時、女性が片手で、しかも足場の悪い所で軽々と持ち上げて歩くことができる、これほど軽い自転車はないと訴えている